



JAPANESE A2 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Monday 10 May 2004 (afternoon)
Lundi 10 mai 2004 (après-midi)
Lunes 10 de mayo de 2004 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.

問題 A か問題 B のどちらかを選び、答えなさい。

問題 A

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。

テキスト 1 (a)

子供にとって、太陽はいつでも生きものだ。それはちかしい、ひそかな話し相手でもある。少なくとも、小学生時代の私にとってはそうだった。今でも一種の苦痛に似た感じで思い起こすのだが。学校に上がりたての頃、私は教室にゆくのがいやでいやでたまらなかった。一刻でも遅く着くように、毎朝のろのろと街じゅうをいつまでも
5 太陽とにらめっこしながら、話しかけながら歩いたものである。

子供の時分から奇妙に孤独で、学校でも他の子供とはほとんど話が通じなかったらしい。この行きかえりの太陽との会話だけが、私の心をひらくのだった。

— お日様も僕のこと見てるのかなあ。こうやって道草してるの、にらんでるかな、
10 と思ったりした。おなかがポンポンになって、プッと放^{はな}ったりすることがある。太陽は嗅^かいだかしら？ いろいろ心配だった。

オヤジかなんかのような人格で、うんと高いところにいる。何かそんなようなもの、
いつくしみと意地悪さを同時にそなえた、えらい大人のような気がした。私は心穏やかでない。つい、にらめてしまう。

目をつぶる。すると、おもしろい。忽然とそれが、赤や緑や青や紫や、色とりどり
15 小さな輪^{こづげん}になって、くるくるちらちらと目の裏に点滅するのであった。

無邪気だったが既に徹底的に孤独だった子供の心に、暗く輝く暗緑色の太陽。それは不気味さと、言いがたい親しみをもって君臨し、私の辿^{たど}っていく運命を暗示した。

(中略)

私も今では、毎日、陽が出て沈むのを何の感動もなしに、その日の出来事として見
20 送っているにすぎない。だが改めてふり仰いでみると、彼の日常的な卑小^{あお}さ、味気な
さに対する憤^{いきどお}りが爆発する。そして私は、身体いっぱい新しい太陽を作り出すのだ。

私は幻想的に太陽を神話化する。しかし、もちろんそれは原始人や子供とは同質ではあり得ない。彼らにとってはそれは本当に生きものであり、その関係は直接的だが、私にとっては詩的な情熱であり、失われた神秘の奪回なのである。

25 分析され、散文化され、われわれの根源的な生命のよろこびと断ち切られて、無感動になってしまった太陽を、再び全人間的に、芸術的に生き返らせようとする欲求なのだ。

(岡本太郎『黒い太陽』、1980年、講談社)

(注) 岡本太郎(1911-96) 芸術家。

テキスト1 (b)

戦争（第二次世界大戦）がまだそれ程苛烈かれつでもないときであったが、私は気象の調査のため満州にたびたび出かけた。あるとき、知人を訪問した際、その人の机の上に満州の科学辞典のようなものがあって、何気なく手にとって見たところ、「蒼ざめた太陽」という項目があって、それが強く私の心に残った。満州名物の黄沙おうさ（蒙古風もうこふう）のときに太陽が青く見えることが書いてあったのである。

5 大気中に微細な浮遊物があるとき、しばしば太陽や月の色が異様に変わるといことは知っていた。だが、蒼ざめた太陽という表現は、いかにも印象的である。実際、この場合太陽や月の面が鮮紅色や、銅色や、銀色に見えたりすることが多く、青色や緑色に見えることは珍しいのである。それを「蒼ざめた」と形容したのは、多少青味が

10 がかかって見えるにせよ、少し誇張し過ぎた表現ではないかと、思っていた。
私はその後間もなく満州の気象台に勤めるようになり、二年ばかり当時の新京しんきょうに暮らした。忘れもしない、終戦の年の四月十八日のこと、この辺すこ一帯は物凄い黄沙に見舞われたのである。（中略）

15 朝から南西から強い風が吹き、大気は流れ来る黄色い砂のために、空気自身の色が黄色になったと思われるように濁にごって来た。戸外に出て見れば、一面の黄色のほかほとんど景色は何も見えず、ただ近いところにある樹が灰色にぼんやり見える気味悪さである。昼頃あたりは室の中も赤味を帯びて来たように思えるので、窓から外を眺めると、確かに大気にこの濁りは黄色の上に朱しゆのような赤味を加え、空を見上げると、これまた一面に赤味あせがかかった褐色になっている。驚いたことには、中天ちゆうてんに青空とも思える、青い色をした僅かの部分があり、その中央に太陽は蒼ざめて、めらめらと弱く輝いている不気味さである。ちょうど一面の赤褐色の雲の中に僅かに青空があり、青い太陽が見えるというようで、私はすぐこれは夕焼の色を反対にしたようだと思った。何故と

20 何故とって、夕焼の時は、青空の一部が西の方で赤くなり、その中にさらに赤い太陽が輝いているのであるが、今の場合は、その青と赤とを取り替えたようになっているからである。

25

（和達清夫『青い太陽』、1971年、東京美術）

（注）和達清夫(1902-95) 地球物理学者。中央気象台で地震の調査研究に従事。

満州……中国東北地方の旧称。

新京……中国吉林省長春市の満州国首都時代の呼称。

問題 B

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。

テキスト 2 (a)

自分の感受性くらい

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて

5 気難しくなってきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを
近親のせいにはするな
なにもかも下手だったのはわたくし

10 初心消えかかるのを
暮らしのせいにはするな
そもそもが ひよわな志にすぎなかった

15 駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

(茨木のり子『自分の感受性くらい』、1977年、花神社)

(注) 茨木のり子(1926-) 詩人。

テキスト2 (b)

自分の持てる力をすべて注ぎ込むこと、それが仕事をするということだと思います。いま、目の前にあるこの仕事をするために、今日までの自分の経験や努力はあったのだと、精神を絞り込んでいく、尖らせていく。

芝居では、演出家や監督が創り上げたい世界を目指して、それぞれの立場の仕事人が主張をするのですが、考え抜いていった私の提案をさらに超えるような思わぬ発想を投げかけられることもあるのです。納得できなかつたり、違うなと感じた時にはとにかく何度でも徹底して話し合いますが、おっ、すごいと思ったら私はいつでも喜んで引き下がります。(中略)

「迷いは、仕切り直す」

10 私は、やりたくない仕事は引き受けないという気持ちで今日までできました。その基準は予算の有無やネームバリューとはまったく関係ありません。真にクリエイティブティーの問題です。わがままと言われようが、無茶だと責められようが構わない。それよりも、気が進まない要素があるとそれが心にブレーキをかけてしまって、私らしい仕事へと駆け上がっていかない。

15 でも、私も人間ですから、何となくモヤモヤしながら引き受けてしまう仕事もあります。投げるわけにはいかない。そんな時には、心にザアッと水を浴びせるようなつもりになって振り出しに戻る。嫌だなと思う要素はあっても引き受けようとしたのはなぜだったのか。やってもいいかなと感じたのは何に惹かれたからなのか。自問自答するうちに、その仕事をもっとはっきり見えてくる。これは妥協するのとは違います。20 自分が納得するように仕切り直すのです。

芝居にかかわる仕事はとにかく儲からないですからね。報酬はお金というより、自分でうなずける舞台ができたかどうかにかかっています。人はだませても自分だけはだませないから、あの時の私は一点の曇りがあった、と後悔するのはどうしても避けたいですね。

(朝倉 摂「心が曇る仕事をしない」、朝日新聞2003.5.11『朝日求人』)

(注) 朝倉 摂(1922-) 東京生まれ。日本の現代演劇を代表する舞台美術家。